

# 福島 の桜 避難者 ら植樹



福島県から取り寄せた桜の苗木を植える避難者家族ら。久万高原町下畑野川で。

## 復興願い 思いは一つ

県空調衛生協 久万高原で交流

東日本大震災の県内への避難者たちがこのほど、久万高原町の空き地に福島県で育てられた桜の苗木15本を植えた。復興を願って植樹活動を続けている県空調衛生設備業協会(45社)が催したもので、秋空の下で汗を流した避難者と同協会会員らは「花の咲くころには元に近い生活ができれば」と思いを一つにした。桜は5、6年後に咲くという。

【中村敦茂】

同協会は昨年10月、宮城、岩手、福島各県、同町と森林づくりから取り寄せた桜も植協定を結び植樹を展えてきた。今回は県内開。復興への思いから避難者らのNPO法人「えひめ311」を通じて避難者に参加を呼びかけ、8家族・25人が今月20日、同協会会員ら約30人とともに同町下畑野川の空き地に集まった。

東日本  
大震災

「えひめ311」を通じて避難者に参加を呼びかけ、8家族・25人が今月20日、同協会会員ら約30人とともに同町下畑野川の空き地に集まった。

福島県南相馬市から避難している同法人代表、渡部眞志さん(33)は「苦しみを共にしてきた避難者が愛媛にいた証になる(将来)バラバラになっても花見をし、集まれる機会を作っていたいたい」とあいさつ。その後、参加者らは手作業で約1時間をかけ、福島県白河市から取り寄せた高さ約1・5メートルのヤマザクラの苗木を植えた。

岩手県陸前高田市から今年5月に避難した菅崎浩丸さん(44)は「震災で自宅と経営する釣具店を失い、自身も津波に流されて約2カ月入院した。植樹に夫婦で参加し「避難者だけでなく、地元の人とも知り合えてうれしい」と喜び、「桜は自分の子どものような。まだ生活は安定しないが、桜が立派に成長するころ、自分もまた店を持てれば」と期待した。

植樹後、参加者らが書いた手紙などを入れたタイムカプセルを埋めた。福島県双葉町から避難した沢上幸子さん(37)は「開けるのが楽しみ。震災から1年7カ月が過ぎても、こういう催しをしてくれるのがあるがたい」と感謝。同協会の佐藤守成会長(71)は「避難者の苦労は想像できないものがあるが、何とか交流をしたかった。皆さんと桜の成長の喜びを分かち合い、時期が来れば花と一緒に楽しみたい」と願っていた。